

個性の文学

偽の、模倣の、不自然な著作は、それが古かろうが新しかろうが、すべて一様に無価値である。それはそれには真実の個性がないからである。

インドのナイドゥ夫人 (Sarojini Naidu) の詩集『渡り鳥』 (Bird of Time, 1915) には、イギリスのゴッス (Edmund Gosse) の序文がある。彼は言う。ナイドゥ夫人はイギリスに留学した時、かつて一卷の詩稿を彼に見せた。詩もまだ良かったが、ただその中のナイチンゲールよ、バラよ、など多くは一派のイギリス詩歌に習見する言葉だったので、彼は真面目に彼女に、まずその詩稿を屑籠に捨てさせ、それから本当の彼女自身の詩を作り始めるようにと言った。その結果が『黄金の門』 (The Golden Threshold) 以下の有名な何部かの詩集である、と。この話は、とても意味があると思う。ゴッスは決してインド人は英国式の詩を作るべきでないと言ったのではない。そうした思想や句調は実際すでに習見しているから、わざわざ彼女にもう一度繰り返してもらう必要はないからに過ぎない。彼女が詩を作ろうとするなら、自分の詩を作ればよいのである。だが彼女はインド人である、だから彼女の生命が宿る詩には自然とインドの情調があり、インド人でなければ感じ得ないものである。しかしながらまたみんなが理解できるものもある。これはまさに彼女の詩歌の真の価値があるところである。つまり彼女の個性があるところだから。正確に言うと、彼女の個性は、当然非インド人とは同じではない、そして他のインド人とも当然同じではない。もし彼女の詩がタゴール (R. Tagore) を模倣して「生の実現」などと言うならば、それは又偽であって、価値はなくなる。あるいは彼女が確かに自分の詩を作ったにしても、それが含むものがもしサティ (Suttee) を崇拝するような人間的感情以外の思想であるならば、インドの「国粹派」——おそらくやはり国滅びても「経」は読まざるべからずを主張するような連中であろう——から見れば、あるいはとても価値あるものかもしれないが、世界の「人」々の理解できないところで、それが人間の文学であると認めることはできない。

したがって我々は次のように結論することができる。(1) 創作は完全に自己を埋没させて他人を模倣すべきではない。(2) 個性の表現は自然である。(3) 個性は個人の唯一の所有であるが、また人類とは根本的な共通点を持つ。(4) 個性は保存できる範囲内の国粹であり、個性を持つ新文学はその国民が有する真の国粹の文学である。(一九二一年一月)

※初出：1921年1月1日『新青年』第8巻第5號